

向島

永井荷風

青空文庫

隅田川すみだがわの水はいよいよ濁りいよいよ悪臭をさえ放つようにな

つてしまったので、その後わたくしは一度も河船には乗らないよ
うになったが、思い返すところの河水も明治大正の頃には奇麗きれいであ
った。

その頃、両国りょうごくの川下かわしもには葭簀張よしずばりの水練場すいれんばが四、五軒
も並んでいて、夕方近くには柳橋やなぎばしあたりの芸者が泳ぎに来た
くらいで、かなり賑にぎやかなものであった。思い返すと四、五十年も
むかしの事で、わたくしもこの辺の水練場で始めて泳ぎを教えら
れたのであった。世間ではまだ鎌倉あたりへ別荘を建てて子弟の
遊場をつくるような風習がなかった。尋常中学へ這入はいって一、二

年過ぎた頃かと思う。季節が少し寒くなりかかると、泳げないから浅草橋あたりまで行って釣舟屋の舟を借り、両国から向島むこうしま、永代えいたいから品川の砲台あたりまで漕ぎ廻ったが、やがて二、三年過るとその興味も追々他に変じて、一ツ舟に乗り合せた学校友達とも遠ざかり、中には病死したものもあるが、月日と共にその名さえ忘れてしまつて、思出すことさえできないのがある。

その頃わたくしの家は生れた小石川こいしかわから飯田町いいたまちへ越していたので、何かの折、その辺を歩き過る時、ぽつりぽつりと前後なくその頃の事が思い出される。昨夜見た夢を覚めた後に思返すよ
うなものだ。

浅草も今戸橋場いまどはしばあたりの河岸である。河水に浮べた舟から見

と、別荘のような広い構えの屋敷が幾軒となく並んでいて、いずれも石河岸から流れの上にさんばし棧橋を浮べている。われわれはそういう棧橋に漕いでいるボートをつないで弁当を食べたり腕のつかれを休めたりしたものであるが、或日或屋敷の棧橋へ出て釣をしている学生を見たが、われわれと年頃が同じくらいなので、一度ならず二度ならず、たびかさな度重るにつれて、別に理由もなく互に声でもかけ合つて見たいような気になっていた。する中うち或日の事、学生の釣り上げたくいな鮒かと思う大きな魚がわれわれのボートに飛び込んだ。学生は大きな声を出してわれわれを呼んだ。わたくしはその魚を押えて学生の立っている棧橋へ舟をつけたので、すっかり心安くなり、その後われわれが弁当など食べているのを見たり

すると、土瓶どびんに暖い茶を入れて持って来てくれるようなこともあった。

つきひ

月日は過ぎて行く。いつかわれわれは舟遊びにも飽きて舟を借りにも行かなくなつてから、また更に月日がたつ。尋常中学を出て専門の学校も卒業した後、或会社に雇われて亜米利加アメリカへ行つた。そして或日曜日ひるすぎの午後、紐育ニューヨーク中央公園のベンチで新聞を読んでいた時、わたくしの顔を見て、立止ると共にわたくしの名を呼んだ紳士があつた。誰あろう。幾年か前浅草橋場の岸の栈橋で釣をしていたその人である。少年の頃の回想はその時いかに我々を幸福にしたか知れない。

橋場辺の岸から向岸を見ると、帝国大学のペンキに塗られた艇て

庫いこが立たつていて、毎年つつみ堤の花の咲く頃、学生きようそうの競漕きようそうが行われ
 て、艇庫の上のみならず、そのあたり一帯が競漕を見にくる人で
 賑かになる。堤の上に名物めいぶつ言問ことと団子だんごを売る店があり、堤の桜
 の由来を記した高い石碑が立っていたのも、その辺であつたと思
 う。団子屋の前を歩み過ぎて、堤から右手へ降りて行くと静かな
 人家の散在している町へ出る。

西洋から帰つて来てまだ間もない頃のことである。以前日本に
 いた頃、柳橋で親しくなつた女から、わたくしは突然手紙を貰い、
 番地を尋ねて行くと、昔から妾しやうたく宅たくなぞの多くある堤下の静な
 町である。

その頃はやつと三十を越すか越さない身の上の事。すぐさま女

をさそい出して浅草公園へ夕飯をたべに行つた。女は暫くして曳しぼら舟きふねどおり通へ引移つたが、いずれにしても山の手から下町へ出て隅田の水を渡つて逢いに行くのがいかにも詩のように美しく思われた。隅田の水はまだ濁らず悪臭も放たず清く澄んでいたので渡わたし船ぶねで河を越す人の中には、舷ふなべりから河水で手を洗うものさえあつた。

曳舟まで出て見ると、場末の町つづきになつて百花園ひやつかえんも遠くはない。百花園から堀切ほりきりの菖蒲園しょうぶえんも近くなつて来る。堀切のあたりは放水路の流がまだ出来ない時代には樹木の繁つた間に小川が流れ込んでいた全くの田園で、菖蒲を植えた庭も四、五力処はあつて、いずれも風流を喜ぶ人にはその名を知られていたが、

田が埋められて町になると、今では一、二カ処しか残っていない、しかも割合に高い入場料をさえ払わねばならないようになってしまった。

向嶋も今では瓢ひょうたん箆へらを下げた風流人の杖を曳く処ではなく、自動車を飛とばして工場の製作物を見に行く処であろう。

青空文庫情報

底本：「荷風随筆集（上）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年9月16日第1刷発行

2006（平成18）年11月6日第27刷発行

底本の親本：「荷風随筆 一～五」岩波書店

1981（昭和56）年11月～1982（昭和57）年3月

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年3月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

向島

永井荷風

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>